大学ポートレート運営会議（第１０回）議事要旨

１．日　時　平成３１年２月４日（月）　１５：００～１７：００

　　場　所　学術総合センター１１階　１１１２会議室

２．　出席者

［委員］石井委員、坂根委員、杉山委員、鈴木委員、西尾委員、長谷川委員、

松ヶ迫短期大学基準協会事務局長（原田委員代理）、水戸委員、谷地委員

［主査］小林大学ポートレートステークホルダー・ボード主査

［事務局］土屋大学ポートレートセンター長、井田大学ポートレートセンター教授、

佐藤評価事業部長、三田大学ポートレートセンター事務室長

（以上、大学改革支援・学位授与機構）

菊池私学経営情報センター長（日本私立学校振興・共済事業団）

２．議　題

（１）大学ポートレート運営会議議長・副議長の選出について

（２）大学ポートレートの現状について

（３）大学ポートレートステークホルダー・ボードからの意見について

（４）その他

３．配付資料

資料１　大学ポートレート運営会議委員名簿

資料２　大学ポートレートの運営体制等

資料３　大学ポートレート運営会議（第９回）議事要旨（案）

資料４　大学ポートレートにおける機能拡充・改修について

資料５　大学ポートレート国際発信の検討経緯について

資料６　平成３０年度　大学ポートレート参加状況

資料７　大学ポートレート公表画面へのアクセス数について

資料８　大学ポートレートステークホルダー・ボード委員及びヒアリング有識者名簿

資料９　ステークホルダー・ボードに意見等を伺う項目

資料１０　大学ポートレートの改善について―データ活用の視点から―（高橋副学長配付資料）

資料１１　平成３０年度大学ポートレートステークホルダー・ボード　主な意見
参考資料１　中央教育審議会　大学分科会将来構想部会制度・教育改革ワーキング審議まとめ
参考資料２　教学マネジメント特別委員会（第一回）議事要旨（案）
（教学マネジメント特別委員会（第二回）配付資料）
机上配付資料　スタディサプリ進路の取り組みと大学ポートレートに期待すること
～リクルートの高校接点・Web マーケティングの現場から～
（スタディサプリ進路　竹田プロデューサー資料）（会議終了後回収）

まず、第三期大学ポートレート運営会議委員について事務局より紹介がされた。その後、大学ポートレート運営体制の説明、大学ポートレート運営会議（第９回）の議事要旨の確認ののち、議題について協議が行われた。主な協議内容は、次のとおり。

（１）大学ポートレート運営会議議長・副議長の選出について
・委員の互選により、議長を鈴木委員、副議長を石井委員が務めることとなった。

（２）大学ポートレートの現状について
・三田室長より、資料４～資料７に基づき、説明があった。

（３）大学ポートレートステークホルダー・ボードからの意見について
・小林主査より、資料８～資料１１及び机上配付資料に基づき、大学ポートレートステークホルダー・ボード（以下、ボード）からの意見について報告が行われた。小林主査からは、スタディサプリ進路　竹田プロデューサー、高橋大阪府立大学副学長からの意見聴取を踏まえ、ボード委員及び出席者から出された意見について報告があった。小林主査の報告及び主な意見は、以下のとおり。

＜小林主査報告＞
・高橋副学長からは大学ポートレートの課題として、相互比較ができない、インプットデータに集中し、アウトプットやアウトカムデータがなく、質保証に結びつかないことが挙げられた。
・中央教育審議会においては昨年末に教学マネジメント特別委員会が設置され、すでに二回開催されているが、現在主な議論のテーマはアウトカムデータ、学修成果の可視

化である。今後、大学ポートレートについても言及されるのではないか。

・リクルートの進学情報サイト「スタディサプリ」を担当する竹田プロデューサーからは、大学ポートレートは各メディアにデータを提供するプラットフォームとして運営されるのが望ましいのではないかとの意見も示された。大学ポートレートは政府の事業であるので大学に関するネガティブな情報も含めた公正かつ信頼性のある情報を出すことが一番の目的ではないかということは、他のステークホルダーからもしばしば指摘されるところ。

・一方で大学ポートレートの提供するデータにおいてアウトカムデータをどうするかということは大きな問題。ボードではアウトカムデータがひとり歩きする懸念があることが指摘された一方、偏差値のみで大学が判断される現状を改善するため、信頼できるアウトカムデータを作ることが重要ではないかということも指摘された。

・以上を踏まえると大学ポートレートの情報活用のためには大学ポートレートの主な利用者を高校生とその保護者だけでなく研究者や大学自身にまで広げ、それを踏まえてデータを整備することが必要になるのではないか。

・中央教育審議会でヒアリングを実施した際、法政大学の田中先生と京都大学の山極先生からコメントをいただいた。田中先生は大学の情報公開は比較的進んでいるというお立場であったが、それに対して委員から、情報公開の取組は大学によって非常に差があり、一概に進んでいると言ってよいのかという指摘があった。また山極先生からは、大学ポートレートは現状あまり活用されていないので、国立大学協会あるいは国で独自にデータベースを作るべきではないかと、大学ポートレートの有効性についてかなり厳しいご意見があった。教学マネジメント特別委員会においても大学ポートレートが大学の情報公開に実際どこまで役立っているか問われており、この点は運営会議の委員の先生方にもご理解いただければと思うため、今回紹介させていただいた。

＜主な意見＞

【西尾委員】アウトプットやアウトカムに関する議論が非常に難しいことは理解できる。アウトカムの指標が何かを定めることは教育活動の目的そのものに本質的に関わること。教育活動の成果指標が何なのかについてコンセンサスを取ることはなかなか難しいのではないか。

【小林主査】ご指摘の通り教育の成果が一体何か、客観的に誰もが合意できるようなもの

が現在ないため、教学マネジメント特別委員会では比較的合意ができる指標から作っていきたいと考えている。KPIのようないきなり数値化できるようなものは非常に限られており、それだけでは足りないということも合意されている。現在教学マネジメント特別委員会では何を教育の成果、学修成果とするか、それをどのように可視化するかについて議論されており、今年の１２月までに結論を出すことになっている。

【西尾委員】国立大学については運営費交付金の基幹経費について競争指標に基づき傾斜配分するという方針が出されているが、来年度の評価指標の中に教育に関するものは入っていない。これはおそらく指標決定が困難であったからであろう。この点からも教育に関する指標をどうするのかは難しいが、一方で何らかの指標は必要なのだと思う。一つお伺いしたい。竹田プロデューサーによるプレゼンテーションは、大学側が提出したデータを第三者が利用可能な共通フォーマットができれば有効活用されるのではないか、という趣旨であると理解してよいか。

【小林主査】竹田プロデューサーのプレゼンテーションについてはおっしゃるとおりである。アメリカではプリンストンレビューという大学情報誌とカレッジボードという大学側の協会がコモンデータセットというものを共同で作っている。大学に関する全データの共通フォーマットだが、どのデータを提出するかは大学の任意で、大学側の負担が非常に減る。高橋副学長のプレゼンテーションでもあったイギリスのUnistatsも似たような仕組みを持っており、ボードでもそのような方向が望ましいのではないかという議論が出た。

【西尾委員】現在はデータそのものに非常に価値がある時代である。リクルートはじめ多くの民間企業が共通フォーマットによるデータ収集に携わっているが、今後、大学ポートレートが同様の取組をする場合のビジネスモデルについては言及されたのか。

【小林主査】竹田プロデューサーはむしろ、大学ポートレートは国の事業であるので、民間企業の取組とは違うものになるであろうとのご意見であった。

【西尾委員】高校生のことを考えればデータが様々な見やすい形で提供されることは大切なことであるが、データ提供により大学ポートレートに資金が還元されるというような話はなかったのか。

【小林主査】そこまでの議論はしていない。むしろそうした観点についてはこの運営会議で議論していただければと思う。

【三田事務室長】ボードでは冗談まじりで、仮にそうした取組がされれば企業としてお金を払うことも考えられるといった話もあった。

【小林主査】来年度以降、文部科学省において全大学を対象にした大規模な学生調査が行われる可能性がある。調査が行われた場合、データは個別の大学ごとに提出されるため、学生の大学への満足度など、様々なデータが大学ポートレートに掲載可能になる。これらの調査結果は直ちに学修成果とされるものではないが、間接評価の指標の一つとして利用されることはあり得る。このあたりについても今後教学マネジメント特別委員会で議論されると思われる。

【水戸委員】大学ポートレートをビッグデータのデータベースとして信頼性のあるものにするには、前提として様々な準備が必要である。現状、大学ポートレートは国公立大学のシステムは大学改革支援・学位授与機構、私立大学のシステムは日本私立学校振興・共済事業団で運営しており、検索項目の追加やデザイン改修、国際発信項目の公表等、実施時期に両システム間でラグがある。信頼性のあるデータベースにするためには、国公私で全て揃える必要があるだろう。これをどういう形で進めていくのか。教学マネジメントで教育成果の可視化指標が決まっても、各大学でそれに対応するための準備期間も必要となるし、予算対応も含めどのような見通しで進めていくのか、大まかなところを示す必要がある。

データ提供についてであるが、Googleは各大学に関する収集データを大学に高い値段で売っている。大学ポートレートがGoogleのビッグデータの集積と分析のレベルに達するまでは相当の時間が必要だと思う。こうしたデータの分析方法や利用方法について、ボードでも検討いただく必要があるのではないか。

【西尾委員】データを提供する側からすれば提供することでどのようなメリットがあるかが本質的な問題。提出されたデータが可視化され、大学ポートレートの利用者に有効に使われることでアクセス数が指数関数的に増えていくためのサービスとは何か、ということを検討することが重要である。

【鈴木議長】大学ポートレートのアクセス数については現在月平均アクセス数３５万件。右肩上がりで増えてきているのも事実であるが、これで十分なのかという議論もあるだろう。

【水戸委員】成り行き任せでは何も変わらない。英国や米国のシステムを想定した１つの大まかな目標を設けないと、現状から変わらないのではないか。

（４）その他

・三田室長より、大学ポートレート国公立版はこれまで、一度参加してその後不参加になった大学の過去時点のデータを掲載していたが、今回新システムへの移行にあわせ、私学版同様、不参加大学の過去時点のデータについては非表示とする旨報告があった。

以上